

## 道東から遠征する理由

道東の湿原河川でもイトウは釣れるが、猿払川を筆頭に、やはり道北は特別な地だ。昨年5月下旬から6月に数回河川を訪れグッドサイズを射止めた『ランカーズクシロ』の佐々木大さんがイトウへの想いを綴った。

# 道北 イトウ 礼賛

写真・文 = 佐々木大 (釧路市)  
Photographs & Text by Takashi Sasaki

## 憧れの魚

日本最大の淡水魚イトウ。いつからか幻の魚と呼ばれ、釣りをしない方でも幻の魚という「イトウ」と答えるほど北海道では知名度が高い。釧路に住む私は、近くにイトウの棲む川が流れている。それだけに子どもの頃から一度は釣ってみたい憧れの魚だった。

初めて釣ったのは中学生のとき。その日、日の出とともに川に入るも、アタリや追いはなかった。正午過ぎ、やっと釣れたのは30cmに満たないイトウ。小さなイトウを生で見るとは初めてだった。魚体に散りばめられた黒点を確認するまで、あまりのスレンダーな体型に加え、マスらしからぬ切れ込みがキツイV字の尾ビレからウグイと思った。それがイトウと分かると、決して幻の魚ではなく自分でも釣れるんだと感動してイトウの魅力にと

りつかれた。「早くメーターオーバーを釣りたい」。そう願い、道東周辺をあちこち歩き回った。しかし、未だにその目標は達成できていない。

## 聖地の道北へ

### ●その光景に感動

いつしか「死ぬまでにメーターオーバーが釣れば」と思うようになったが、年齢を重ねるうち、「いつまで川を自由に歩けるだろうか」と心配になり、動けるうちにあちこち行ってみようという考え方に変わった。そうして道東を拠点にイトウ釣りをしていたが、ここ数年は道北に足を伸ばす機会が増え

94cm。ボウズもあれば、こんな日もある。ルアーは95mmのサスペンドミノー。なお、イトウの歯はとてつ鋭い。中型クラスでも根もとが太く、サメの歯のように先が内側を向いている

た。産卵期を外して5月中旬以降から遠征する。

初期は産卵後または産卵に参加しなかった魚が多い下流域、6月以降は中流域にも入る。初めて訪れたとき、大きなイトウが目の前で何度も小魚を追い回す姿や、悠然と泳ぎ去る姿を見て感激。一日に何尾ものイトウを目視できることに驚いた。

### ● 開始直後の94cm

去年5月末から6月、道北へ。仕事が終わったと同時にクルマを走らせると、深夜には釣り場に着くことができる。車内で仮眠を取り、夜明けと同時にロッドを振ると決めていたのが、起きたのは5時半過ぎ。とっくに日が上がり、すでに大勢のアングラがイトウをねらっていた。

道北の湿原河川も道東と同様、変化に乏しくどこを探ってもいいかわりにくい。岸を歩きながらボイルやモジリを探しても、水面は静まり返っている。しばらくすると岸際に小規模なサケ稚魚の群れを発見。「ベイトの近くに魚あり」。そう信じ、その周辺をねらった。サケ稚魚の群れを散らさぬよう、同サイズのシンキングミノーをキャスト。しかし、異常なし。

広範囲を探るべく歩きながらキャストを繰り返してい

ると、水深1mに満たない場所に良型のイトウが定位していた。が、残念ながら私に気づき、深みに姿を消してしまった。もしかしたらサケ稚魚を捕食するために浅場に出ていたのかもしれない。あまり深くウエーディングするのは考えものだ。朝夕のマズメ時など活性が高い時間帯には、自分の後ろのさらに浅い岸際で小魚を追い回していることもある。とはいえ、日が高くなり水色もクリアな状況下、こんな浅場にいるとは予想外だった。

気を取り直して潜行深度1m以下のサスペンドミノーにチェンジ。さらに浅いポイントを丁寧に探る。ルアーチェンジして5分も経たないうちに、ミノーの後ろにイトウが追尾してきた。私の側まで一定の距離を保ちながら追ってきたものの、食うまでにはいたらない。だが、ルアーチェンジの甲斐はあったようだ。

今度は、なだらかなカケアガリのある緩い流れにアップクロスでキャスト。深みから浅場にミノーが差しかけた瞬間、深みからメーターくらいありそうな魚体がスッと現われた。と同時に、ミノーを吸い込むように食った。いつもはここで早アワセをして、ルアーがスッポ抜けてバラしてしまうことが多い。しかし今回は、魚の重さがロッドに伝わるまでアワセを我慢。食ってから約2秒後にアワセを入れるイメージで臨んだ。が、その2秒



膝下ほどの浅場までミノーを追ってきた二尾。砂浜に乗り上げてアザラシを襲うシャチのようでもエキサイティングだった。ルアーは70mmのフローティングミノー

それから2時間ほどアタリも追もない状況が続いたが、下げ潮に変わり流れが速くなったと同時に、あちこちで小魚の群れに突進するイトウの姿が見られた。あらゆる種類のルアーを駆使し、数尾ヒットさせることができた。

### ベイトの種類が豊富

晩春から初夏にかけて、道北の各河川で最も重要なベイトはトゲウオ科のイトヨだろう。ほかのベイトより俊敏さに欠けるうえ、群れで行動するため、イトウにとっては捕食しやすい存在のはず。今回の釣行でもランディング直後に口からイトヨを吐き出したイトウがいた。そのほか、サケ稚魚、シラウオ、ウグイ、5月下旬には降海する銀毛ヤマメと、河口域は多種のベイトが行き来している。これらの動きや種類を把握することでルアーのカラーやサイズを選ぶといいだろう。

イトウ釣りでは「ビッグミノー=ビッグフィッシュ」と、大きいルアーを好む方が多い。私もイトウやアメマスには130~180mmのミノーを使うが、今回は不発。マ



5月末になれば、午後7時でもこれだけ明るい。とはいえ、安全な釣りを意識すると、暗くなる前に納竿すべき



この日は50~60cmのイトウが多かった。1mに迫る大型魚ばかり注目されるが、小~中型が釣れると世代交代がうまくいっていると感じて少し安心する



釣りあげた魚は酸欠気味になってくると体色が薄くなる。特にイトウは写真のように背中が明るくなり、弱るのが早いと感じる。水通しが悪いと酸欠になりやすいので注意(上) 水通しがよいところでは背中の色が濃いままで、リリース時も素早い動きで流れの中に戻っていく。弱っていると感じたら自力で泳ぎだすまで根気よく保持してあげたい(下)



猿払川河口周辺は平日でも大勢のアングラでにぎわう。魚の大小にかかわらず、ヒットしたら注目の的だ

はとても長かった。

フッキング後は大型イトウ特有の「グアングアン」とゆったりしたトルクのある首振り。その後、下流に向かって走る。障害物はほとんどないポイントゆえ、魚を強引に止めないようドラッグのテンションを弱めに設定する。これまで何尾も良型イトウをバラしているが、そのほとんどは魚の動きを封じ込めるような強引なやり取りのせいだと考えている。今回はその教訓を生かし、ドラッグとロッドのパワーで止めるのではなく、魚の動きに合わせて自分が動くように心掛けた。もしかしたら初のメーターオーバーかもしれないサイズ。脈拍は上がる一方。だが、焦らず冷静なファイトの末、さほど時間をかけずに無事ランディングできた。

太さ、長さ、顔の大きさ、どれをとっても1mを超えたと思った。しかし、計測してみると94cm。それでも、私の自己記録82cmを12年ぶりに更新することができた。釣りを開始してから1時間も経たないうちの出来事。今日はもう釣りをしなくてもいいと感じるくらいの達成感があった。素早く撮影をすませ、しばし自力で尾ビレを動かすまで水中で魚体を支える。と、ゆっくりと、そしてしっかりと、尾ビレを動かして流れの中に消えていった。



### お願い

猿払川のシンボルであるイトウの資源保護のため 4月1日~5月20日までの期間は、中上流域での釣りの自粛をお願い致します。

猿払村・猿払イトウの会



道北周辺は風の強い日が多く、風力発電用の風車が立ち並ぶ。6月上旬でも最高気温が2桁にならない日も珍しくない



気温は上昇しても、水温はなかなか上がらない。冷えとの勝負でもある。寒さが予想される日は、ザップ『バスデザイン ストレッチウォーム アンダーシャツ』と『同タイツ』を着用している



高低差の少ない道北河川は、かなり上流まで湖の影響を受ける。写真のような潮目(はつきり)と現われることもある。単調な流れの中では、こんな変化が見逃せない



小～中型のイトウが何度かシラウオを吐き出した。トゲウオほど重要なベイトではないかもしれないが、クリア系ミノーを持っていて損はないはず

イトヨ。表層でイトヨを捕食するイトウを何度も目撃しているアングラーは多いだろう。イトヨの群れの近くにイトウがいるといっても過言ではない

浅場に群がるアミ類を、盛んに捕食するサケ稚魚の群れ。それに襲いかかるイトウの姿も見られた。小さなベイトの動きにも注目したい

どちらにもいえることは、柔なタックルは使わないほうが自分と魚のためだということ。特に大型のイトウは魚に主導権を与えすぎるとファイト時間が長くなり、ランディングしたときには

ツチ・ザ・ベイトを意識した選択、もしくは100mm以下のルアーに軍配が上がった。どんな状況でも臨機応変に対応すべく、多種多様なルアーを持ち歩く重要性をあらためて実感した。

魚も釣り人も疲労困憊でリリースに時間がかかりがち。適したロッドパワーは一概にはいえないが、ルアーウエイト18g以上のスペックが好ましい。

## 楽しい遠征のために

### ● 柔なタックルはNG

ベイトとスピニングのどちらでもいいと思うが、風の強い日を想定するとライトラブルの少ないスピニングタックルが無難かもしれない。ただ、大型のイトウをヒットさせた後の安心感はベイトタックルに分がある。私は天候に合わせて両者を使い分けている。

### ● 風と低温

道北周辺の海岸線をクルマで走っていると、風力発電用の風車が立ち並ぶ場所がいくつかある。一年を通じて風は強い。釣行時の日中は暑く汗ばむ陽気だったが、ウエーディングしていると下半身が冷えてきた。朝夕はかなり冷え込む日も珍しくない。初夏の装いで行くと痛い目に遭う。6月中旬まではネオプレンのウエーダーを履き、保温性の高いアンダーウェアを着用して後悔しないはず。



道北は猿払川があまりにも有名だが、ほかにもイトウの棲む川はある。自分の足と勤を頼りに各河川を探索するのも面白い



「イトウ＝ビッグミノー」というイメージが強いかもしれないが、60mm以上100mm未満のミノーに反応がよかった。ルアーは70mmのヘビーシンキングミノー



8フィート5インチのヘビークラスロッドが、グリップ内で曲がっている感触が伝わるほどトルクのあるファイト。これだからイトウ釣りはやめられない



すね下までしかウエーディングしていないが、イトウは足もとまで何度もルアーを追ってきた。ウエーディングしないほうがいいのかもある

## その大切さを肌で感じる

かつては東北の一部地域にもいたらしいが、現在、国内では北海道にしかイトウは生息していない。皆さんご存じのとおり、絶滅危惧種（環境省のレッドリストで絶滅危惧IB、国際自然保護連合会で絶滅種を除いた最上位である絶滅危惧IA類）に指定されていて、生息が確認されている道内の河川でも個体数は決して多いとはいえないようだ。その原因はいくつもあるだろうが、森林伐採や河川改修など生息環境の悪化が最も影響していると思われる。

そのほか、昔はサケ・マスの稚魚を襲う害魚としてアメモスと同様に粗末な扱いを受けたこと、イトウの個体数が減ってくると大型魚が珍重されて釣り人による乱獲もあっただろう。今でこそキャッチ&リリースが定着し、昔ほど釣り人による大規模な乱獲はないにせよ、現状がいい状態とはいえない気がする。絶滅が危惧されている魚を何の規制もなく、誰でも簡単に釣りができる国はかなり珍しい。猿払川をはじめイトウが生息する数河川では、イトウを守ろうと地域の方たちが保全、保護を目的とした活動をしている。私たちは釣りを楽しむうえでお願いであるローカルルールに従い、モラルある行動を心掛けたい。

一方で、「絶滅の恐れがある魚なら、釣らないでそとしておいたほうがイトウのため」という意見も聞く。イトウのことを考えれば一理あるのかもしれない。だが、イトウが好きで釣り人である以上、釣りたいというのが釣り人の性。イトウに関心を持ち、釣りに行くことでイトウの棲む川、それを取り巻く環境の変化にいち早く気づけるのも釣り人。釣りの自粛やイトウの棲む川への立ち入りが規制され、気づいたときには生物の暮らしを無視した河川改修だらけの水路と化してしまうのはゴメンだ。

道東でイトウが棲む別寒辺牛川や風蓮川では、一般の方が立ち入ることの難しい上流部に意味のない砂防ダム群がこっそり造られ、イトウをはじめとした海と川を行き来する魚の障害になっていた支流もあった。今でこそ砂防ダムに割れ目を設け、魚が行き来できるようだが、河川横断物はないにこしたことはない。私は今まで以上にイトウに関心を持ち、釣りをすることで魚の大切さを肌で感じ、見守っていきたく思っている。



最近、腹が上に向いた状態で流れてきたり、明らかに釣り人のリリース失敗による亡骸を見ることがある。他人のことをいえる立場でもないが、確実なリリースを心掛けたい



主な使用ルアー。左からスミス『チェリーブラッドLL90S』、メガバス『ヴィジョン95』、ジップベイツ『リッジディープ70F』、ダイワ『ウイズミノー70FS』、デュオ『レアリス バイブレーション62』。ミノの出番が多かったが、遠浅な場所はリップレス、足もとから深い場所はバイブレーションの実績も高い



スピニングタックル。ロッドはフィールドハンター『ロジックスーパートゥイッチャーポロンLST85HL』、リールはアブ・ガルシア『レボMGX3000SH』、ラインはモリス『バリバス スーパーラウトアドバンスマックスパワーPE』1.2号、ショックリーダーはサンヨーナイロン『アブロード ナノダックスショックリーダー』5号1.5mをPRノットで接続

ベイトタックル。ロッドはアブ・ガルシア『ソルティーステージKR-XシーバスSXSC-962ML-KR』、リールは同『レボパワークランク6-L』、ラインはサンライン『トラウティーストダークネス』20ポンド